

さいたまゆかり

じつは、さいたま市とゆかりのある作家さんはたくさんいるんだ。知っている人はいるかな？



初段

『おばけやさん ① これがおばけやさんのしごトです』

おかべりか 作 借成社



こまったことがあれば、おばけがおてつだいします！
おばけやさんは、おばけをかしたすお店です。お店のあるじは小学生の男の子、たもつ。おばけはたもつに「こもりうた」をうたってもらうために、しごとをがんばります。ある日、宝石店のるすばんをしていると、どろぼうが入ってきて…。
さいたま市出身のおかべりかさんによるシリーズ作品です。

『ふるやのもり』

瀬田貞二 再話 田島征三 絵 福音館書店



むかし、あるむらのはすれに、じいさんとばあさんがすんでいました。あるばん、うまどろぼうとおおかみがふたりのこまをぬすもうとしのびこみました。そうとはしらないばあさんはじいさんにいいました。「おりゃ、どろぼうよりも、おおかみよりも、ふるやのもりがいちばんこわい」
さいたま市に住んでいた瀬田貞二さんの語りが魅力的です。

中段

『イルカをおそった黒い波』

今関信子 作 徳永拓美 絵 汐文社

海のそばにある水族館で、イルカのあかちゃんが生まれた。ところがその翌年、タンカー船が事故を起こし、積んでいた油が海に流れ出してしまう。プールに油が入ったらイルカの命があぶない。職員とボランティアが力を合わせて、あかちゃんをふくめた十四頭のイルカを移送する計画をたてるが…。市内の高校を卒業した作者が実際の出来事を元に語る。



『ぶたにく』

大西暢夫 写真・文 幻冬舎エデュケーション

知的障害を持つ人たちが暮らすゆうかり学園。ここでは豚を育て、食べ物にするまでを見届けている。生まれてから肉となるまでわずか10か月。走り回ってじゃれ合って、子豚はみるみる大きくなっていく。重さは生まれたときの100倍になる。さいたま市に住んでいたことがある大西暢夫さんが、身近な食べ物である豚に注目し、命のサイクルを描いた写真絵本。



上段

『山のトムさん』

石井桃子 作 深沢紅子 画 箕田源次郎 画 福音館書店



ネズミを退治するため、トシちゃんの家にもらわれたネコのトム。えものをとる訓練をしたり、病気になるったり、山で迷子になったり…家族と一緒にたくましく成長していきます。北国のある山あいの村での、どこかなつかしい昔の暮らし。
さいたま市出身の作者が、戦後移住した宮城の山での体験を元にしたお話です。映画化もされています。

『レガッタ！水をつかむ』

濱野京子 作 一瀬ルカ 画 講談社



美園女子高等学校に入学した有里は、自分が一番になれるスポーツを探して、初心者の多そうなボート部に入った。ボートのことを何も知らなくて、漕ぐことはできる。そんな思いで練習を続ける有里は、体力こそ一年生で一番だったけれど、他の部員たちとうまく力を合わせられないままで…。
埼玉県を舞台に、市内の高校取材して書かれた一冊。